

70

『医家千字文註』の構成と引用

浦山 きか

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 客員研究員

I はじめに

『医家千字文註』は、永仁元（一二九三）年に成立した惟宗時俊の撰になる「医学入門書」である。原本は幕末に消失し、天保年間に刊本として流布した。また、『続群書類聚』にも収められている。その内容は「医家にとって必要な学識を『千字文』の形式で四言二句の要訣とし、さらに注をつけて解説したもの」であり、その評価は「鎌倉時代の代表的医書の一つ」とされる（以上「」は小曾戸洋『日本漢方典籍事典』当該書の項より、大修館書店、一九九九年）。

その内容は『医談抄』『医家千字文註』などに盛られたような医事を主題とする説話を医事説話と呼んでみたい（美濃部重克編『日本文学資料集成・二十二・医談抄』より、三弥井書店、二〇〇六年）というように、「医事説話」の一つとして評価されている。また、注釈部分に引用された医書と人名については篠原孝市・榛葉静江により早期に指摘されている（東洋医学善本叢書「解題・研究・索引」所収、東洋医学研究会、一九八一年）。これらのいずれもが部分的な分析にとどまり、内容についてはほとんど考慮されていないに等しい。そこで『医家千字文註』の全体的かつ詳細な研究は、日本医学史を読み解く上で必須なものといわざるを得ない。

II 全体像と製作意図

成立年代の決め手となる「永仁元年大呂中旬」を末尾に付した序文があり、四言二句ずつにそれぞれ注釈を従える形式で二五〇句、さらに末尾に「管窺次韻，綿聯作吟」八字及び注釈（起於平声東韻，至于慢韻，每韻六字至二十一韻矣）を付す。序文は「蓋聞医道如林，学者未得其萌芽。□□如海，学者未得其涓滴」より始まり、孫思邈の『千金方』卷二「大医精诚」に見える「世有愚者曰読方三年……」を引き、医学というものが「誠是遠而難望，深而難測之故也」であるためという。さらに独学で倦まず弛まず医学を学んで為したのが本書であり、「今魯愚之集千字也，披医書兮撫十全之要，乃以立意為宗，不以能文為本」とある。意図は医書の要諦の収集にあり、能文には無いという。

III 本文の構成と注釈の引用

換韻によって細かな段落に分かれることが多く、内容によって注釈に引用される書が大きく異なる。本草に関わる段落においては、『文選』にも収録される漢賦の作りに似る。

注釈に最も多く引用されているのは『太素経』であり、その「楊上善注」も記される。次いで『医説』（一二二八年刊行）であり、「医事説話」を内容とする段落に主に引用され、「『医説』なくして『医談抄』は成立しなかった」（美濃部編前掲書）ように、『医家千字文註』もまたその影響下にあると考えられる。『太素経』と並んで『明堂経』も引用されており、「明堂経楊上善注」もまた引用され、中には現伝の『黄帝内経太素』及び『明堂』に見られない引用も少なからず見られる。『千金方』「大医精诚」からの引用が多く、その影響が大きかったことも指摘できる。『素問』は「新校正注」を一度引くとともに、王冰注を引いている。本草書は『本草』『新修本草』の引用が多い。

IV 本書の評価と考察

『医家千字文註』は、鎌倉期の医学観を伝える重要な医書であり、現存する楊上善注『明堂』や『太素』の復元に資するものと考え得る。さらに日本における「医師の心得」が「大医精诚」を基礎に構築された経緯を推測させるものとして、さらなる検討が必要と考える。

※本発表はJSPS 科研費二四五九〇六四二「日本伝統医学における基礎理論の基盤整備」の助成を受けたものである。